

黎明期ナショナル・パークについての 情報とその紹介者たち

丸 山 宏

Informations and Introducers on the National Park
in its dawning period in Japan.

Hiroshi MARUYAMA

要 旨

1872年、アメリカに誕生したナショナル・パークは、日本において20世紀に入り紹介される。それは明治30年代末という、国家意識の高揚する時期である。

ナショナル・パークの紹介者たちは訳語をつくり、それぞれの立場でナショナル・パークを捉えた。当然、その情報にもバイヤスがかかる。

国粋主義を信奉する政教社から出版された雑誌『日本人』には「公園の外、国園なるものあり」という表現で紹介された。これは『週刊平民新聞』、『中央公論』に抄録、再録された。

宗教学者、姉崎正治は明治38年に「国園制度の制定を促す」を『太陽』に発表し、「日本主義」的あるいは「国粋主義」的ともいえる「国園」論を展開した。

ジャーナリスト、坪谷善四郎は明治40年に姉崎等とともに訪れたヨセミテ国立公園について、「ヨセミテ溪遊記」を書き、「国立公園」の訳語を用いた。彼は観光資源としてナショナル・パークを捉えた。

植物学者、三好学はドイツのコンヴェンツの影響を受け、ナショナル・パークを天然記念物保存の一手段として捉え、訳語には「国有公園」、「ナショナル・パーク」、「国設公園」を用いた。

鉄道院の木下淑夫は鉄道経営の立場から、カナダ、アメリカのナショナル・パークについて帝国議会で発言した。彼は「国立公園」の訳語を使用した。

1920年代には「公園」と混同して理解されることもあったが、様々な訳語が淘汰され、「国立公園」の訳語がほぼ定着する。

この淘汰される過程は、ある意味で日本における「国立公園」概念の形成する過程でもある。

1. 序

1872年3月1日、イエローストン川の上流の一部が公園 (Public Park) に指定された¹⁾。これが世界で最初のナショナル・パーク、イエローストンの誕生となる。

1872年という日本においては明治5年にあたる。ようやく、その翌年、明治6年1月15日に公園に関する太政官布告が出されるという時期である。しかし、公園についての法律が出されることと、公園について当時の社会が、それを認識できる状況にあったかは別問題である。

公園という概念がいつごろ社会化されるのか、これもなかなか難しい問題である。明治36年に開園される日比谷公園あたりであろうか。洋式公園の誕生は当時の新聞を賑わしている。しかし、その記事さえも全国に流布したとはいえない。ましてや、新生のナショナル・パークは認識の論外にあったといえる。情報として受容されるのは、明治30年代末、日本において、国家意識が高揚するまで待たねばならなかったのではないか。

それでは、それまでイエローストンやヨセミテが紹介されなかったのかということそうではない。ナショナル・パークとしてではなく風景地、景勝地として紹介されている。

青木嵩山堂主、青木恒三郎の編輯になる『世界旅行万国名所図絵』³⁹ 全七巻の第一巻「亜米利加州の部」には、イエローストンについての記述がある。この『万国名所図絵』は明治18年以降、逐次刊行され、ずいぶん人気を博したらしく、再版（M. 22.1 第一巻増補版）の緒言には5万部の売れ行きであったとある。本文は間歇泉の銅版面の挿絵入りで記されている。少し長くなるが引用する。

ヤルローストン奇泉之記 ソルトレーキ府の東北方四百マイルの内地には世界に無二の奇泉あり。道路頗る険なれば、近年は誰れ一人探討するものなかりしが、一千八百七十年初めて是を発見し、一大勝地となりしなり。さて其土地の景状は、山水幽雅清淑と太古の真気を存したり。ヤルローストンの湖は中部に在りて同名の河流は落機山^{ロフキ}に出で、当湖に注ぎ湖上の清潤奇峯と相映し、百澗雲を蒸す如く漂て満ち溢れては北方モンタナ部に入りミソリー湖の源となる。其兩岸の巖壁は絶壁屏立千英尺乃至二千英尺あり。奇石怪巖凸凹し、或は城砦の状をなし、尖塔及螺旋塔奇状全く一ならず。山中ニ大瀑あり。上瀑下瀑の称へあり。此地小湖また多く、奇泉の数は夥多にて、泥泉よりは平常に泥を噴出し、噴泉は日夜時間を定めつつ清水を七十尺余の上に飛揚し、流黄泉、熱湯泉は名の如く、流黄熱湯等を噴く。其他奇怪の泉多く逐一枚挙に遑まなし。（p. 41）

当時としてはかなり詳しい記述であると思われる。

また、明治21年には翻訳もので『伊曼仏英米五大国漫遊』³⁹ が出版された。そのアメリカの「地勢」の項にはこう述べられている。

合衆国ハ又タ名勝ノ地ニ富ム就中ほどそん河トじよるち湖トラ以テ最佳トス歐洲ノらいん河トぜねぶ湖トニ比ス可キナリ又タ自然ノ大奇観ニハないやがら瀑まむもす崖及ヒ江るろーすとん（Yellowstone 一筆者注）ようすまいと（Yosemite—筆者注）ニ公園アリ共ニ天下無比ト称ス（p. 154）

「公園」という訳語が使われているが、特にナショナル・パークを意識したものではない。

わずか二つの例に過ぎないが、景勝地としての情報は伝わっていたことが理解される。ただ、日本側でナショナル・パークということばが、理解できずに等閑視されていたのか、そもそもアメリカにおいてイエローストンやヨセミテがこの時期、ナショナル・パークとしてどれほどの知名度があったのかは不明である。今後の研究をまたねばならない。

本論稿に先行する研究として、俵浩三氏の『『国立公園』という用語の初使用についてのメモ』⁴⁰、それに針ヶ谷鐘吉氏の「日本人が最初に踏破した国立公園 訳語『国立公園』の原点を探る」⁴¹がある。いずれも「国立公園」という訳語の初出をめぐる展開されている。本稿は上記の研究成果を踏まえ、アメリカに生まれたナショナル・パークが日本に紹介される事例を具体的に追ってみたい。

尚、本稿の性格上引用文が長くなり、読み辛くなることを考慮し、旧字を新字に改めたところがある。厳密を期する方には原文にあたっただきたい。また、本文中のM.、T. はそれぞれ明治、大正の年号を表わす。

2. ナショナル・パーク情報の諸相

1. 『日本人』の「国園」紹介

明治37年、雑誌『日本人』の第202号（M. 37. 1. 1発行）に「各国の主なる公園」と題する論説が掲載された。この論説は前年の明治36年6月1日に日比谷公園の開園されたことがその契機となり、諸外国の公園の事情について論じたものと思われる。三頁ほどの短いものであるが、当時、日本が外国の公園をどう理解していたかを知る上では興味深いものである。

論説は、上野、芝、浅草、それに日比谷の各公園と各国の公園面積の比較からはじめている。次いで、各国の公園の特徴を要領よく纏めている。

英国についてはこう書かれている。

英国の公園は大なる牧場を区画したるやの観あり、国内の平地、其の一半は田地にして他の一半は牧場たり、而して其の牧場の一隅を区画する、乃ち英国流の公園茲に成る。

いわゆるイギリス風景式のことである。

ドイツについては、イギリスと形態において異なるが、その実、つまり、公園内を逍遙散策できるということでは同じであり、「ドイツ人は其の性森林を好む、謂ゆる自由は独逸の森林より出づというもの、多少没すべからざる理あるに似たり」と。

フランスについては、特にビット・ショーモンについて記されている。「凡そ人造の山水を造築したる此の如きは他に之れ有る無し、元と奈破崙三世の時、貧民窟として常に悪事の淵藪たりしを取り毀ち、百万円を投じて造営したる所なり。」

アメリカについてはこのようにはじまっている。

米国は新開地なるが故に国内に在る所の公園亦た種々の形を成す、紐育は其の地質岩石多きが為に、公園を作る勢ひ人造的ならざるを得ざるも、費府の公園は見渡す限り芝草を植え、全く天然の景致を具へたり

この後にナショナル・パークについての記述が続く。

米国には又た公園の外、別に国園なるものあり、其の随一たるイエロー・ストーンは八百余方里の広きに亘り、高山峻嶺、天然の絶景を收拾す、ヨセマイトは、前者に較ぶれば小なれど、亦た同じく偉大俊崇なる天然の風景を収めしもの、譬えば我が富士山全体を認めて公園と為し、日光山全体を収めて公園と為すが如し。（傍点筆者）

ナショナル・パークには「国園」の訳がなされ、いわゆる「公園」とは区別されている。

論説はこのあと、近代化する日本において、将来の公園の必要性を述べている。「将来商工業の益々繁盛に赴くに従ひ、必ずや市中に住居する者をして充分の庭園を有する能はざらしむるの時あるべし、是に於て各自漸く新鮮の空気を吸ひ青草緑葉を看るの必要を感じ、随て公園の必要を感じるに至るならん。」

最後に万国博覧会を日本で開く時には、会場の跡地が「大なる公園」として保存されることを訴えて論説を結んでいる。

この雑誌は政教社から出版されていたもので、創刊以来（M. 21. 4. 3創刊）、無批判的な欧化主義を排斥し、日本固有の文化を高唱した論調が貫かれていた。この時期は三宅雪嶺が主宰者であった。『日本風景論』の著書で知られる志賀重昂もそのひとりである。彼が日本独自の風土や歴史文化を通してつくられた国粋（Nationality）こそが肝要であるとしたのは周知のことである。

この『日本人』に掲載された「各国の主なる公園」の反響は、ただちに『週刊平民新聞』の第9号(M. 37. 1. 10)、及び『中央公論』(M. 37. 第19年1号)に再録抄録されたことでもわかる。

『週刊平民新聞』には「文壇演壇」の項に掲載された。前書きには「各国の主なる公園(日本人二百二号)公園の発達を熱望する吾人は茲に此の文の要点を紹介せずして止む能はず」とある。

『中央公論』には、「思潮」欄に「各国の公園「日本人」社説」として、前の部分が一部省略されているが、再録された。

この論説はナショナル・パークについて紹介されたものとしては早い時期であると思われる。

2. 姉崎正治の「国園」論

世上、日露戦争が終結に向かうなか、当時の総合雑誌である『太陽』(第11巻、第5号 M. 38. 4. 1)に姉崎正治(号を嘲風)の論説「国園制度の制定を促す」が掲載された。姉崎はこの明治38年4月、東京帝国大学に設置された宗教学講座を担当する。また、彼はすでに評論家としても活躍しており、「国園制度の制定を促す」を発表する前年に上梓した『復活の曙光』(M. 37. 1刊)は人気を博し、文芸評論家としての地位を不動のものとした。また、高山樗牛の親友としてもよく知られている人物である。

さて、この論説についてであるが、姉崎のいう「国園」ということばが、いわゆるナショナル・パークの訳語であるのかどうかは、これを読むかぎり確認できない。アメリカの記述は全くない。彼自身、明治33年から3年間の滞欧の経験はあるが、アメリカにはこの時点で一度も訪れたことはなかった。もちろん、前に述べたようにナショナル・パークの情報はわずかではあるが紹介されており、姉崎がナショナル・パークを知っていたとしても不思議ではないし、また、滞欧中に知った可能性もある。

「国園制度の制定を促す」の冒頭はこうはじまる。

天然の美に富む事に於て世界の中に日本と肩を比べ得る国は果してどれだけであるか。平和な南ドイツの山林、豪宕なる瑞西の山嶽、幽邃なるスコットランドの湖水、絵にも画かれ詩にも詠ぜられた世界の美国は決して少くないが、日本の如く此等の諸種の美を包有して、之を添飾するに大海碧空を以てし、草木禽獸の変化を以てして、真に天恵の美を恣にしておるのは日本の国土である。若し錫蘭島に印度洋上の小天国という名を許すなれば、日本は慥かに太平洋上の大公園である。日本人自身がその国土の美を誇り、外国もこの国を世界の遊園と見るのは決して偶然ではない。

彼の大きなテーゼは「国土を愛する、国土の美を愛する精神」が愛国心を育むというものである。また「愛国心は愛郷心に密接に関連する」とも述べる。「北ドイツやロシアの様な平坦広漠の土地でさへ、その住民の愛郷心はその土地の天然を離れない事を見れば、瑞西や日本の如き美国の住民には、特にその故郷を懐ふの情が強く、其愛郷心が一つの原因となって又愛国心に富む事は至当である」と。

さらに「国土と愛国心との密接なのは、国土山川の美という事許りでなく、一国国民の祖先から受次いで来て居る精神の発表、即ち文学と国土とが密着しておるからも生ずる。」と姉崎の論は文学にまで広がる。安倍仲磨の「三笠の山に出でし月かも」はもはや一個人の歌ではなく国民文学の範疇に入り、その文学と国土とが密接に関連し、それが愛国心的一部分となると論じている。

文学は国民精神の精華で、従て国民の精神的団結力である。而してその文学と国土山川とが相合して人に自分の国という観念を与へる力の強い事を思へば、一国の土地山川と愛国心との離れ難い事も自ら明らかである。

さらに文学は国を越えて、愛国心とは称することはできないが、この種の感情、愛情が芽ばえらる。

スコットの「湖上の美人」を読めばスコットランドの山水を。シラーの「ウィリアム・テル」の芝居を観れば「アルペンの山嶽、四州湖上の空気」を。ハイネの詩はライン川を等々。「此等は、一国の天然が如何に驚くべき魔力、引力を持っておるかを証するものである」と。

これは滞欧中の体験からの感想である。彼は後に博文館から『花つみ日記』(M. 42. 6) という紀行文を上梓するが、そのなかにある滞欧中の日記、「われやいづこの記」⁹⁾ がその感激を物語っている。

姉崎は翻って、日本の状況を憂慮する。

日本は美術国であるといふが、術の美なるよりも天然の美なる事は数等の上で、又実に至大の勢力である。然るに今の日本人は果してこの天与の美に住しておる事を明かに自覚しておるか。自覚しておるなれば、果して能くその美なる国土の天恵を尊重しておるか。甚だ覚束ない次第である。自分の国土の美を自覚した人民なれば、果して今の日本人の如くその美を軽んじておられやうか。

京都東山に林立する煙突と黒煙。「嵐峡の美は鉄道で滅せられた」と。須磨の浦には、私邸のために白砂青松の眺めは今はない。富士の景色は、鉄道の電柱で大なしである。等々。

姉崎は日本の急速な近代化あるいは工業化に対して嫌悪感を持っている。彼にとっての疑問は「此の如く天然の美を破壊しなければ工業を起し得ないか、又金が得られないか」ということである。

ここで姉崎は「国園」の制度を提案する。

即ち某々の地域を^{●●●●●●●●●●}一^{●●●●●●●●●●}国の公園として、その^{●●●●●●●●●●}国園の範囲に対しては、要塞地域と同じ様に、地形変更、山林伐木、家屋建築に関する制限を加へる事である。それ故に^{●●●●●●●●●●}国園制度は今の所謂公園とは大にその性質を異にして居る。その地域内の土地は官有にするにも及ばず、住民にはその他に何等の束縛をも与へず、只その風景を害する様の行動、建築などを制限するのである。(傍点筆者)

姉崎のこの発想は、今日の風致地区の考え方に近い。また、いわゆる国立公園の地域制の考え方も含むものである。「国土の美観を保護するといふ一種の国防の為に同様の法律を行ひ得る」という見方は時代を反映している。

さらに彼の「国園」論は続く。

若し某々の^{●●●●●●●●●●}国園の範囲に一層修飾を加へ、或は交通或は宿泊の便を加へる必要があれば、それは私立の保勝会か、或は営利の会社がやるであろうし、国家は只根本に^{●●●●●●●●●●}国園の範囲とその制度とを定めて、その地域では将来にも天然の美を破壊させない様にするのみで足りる。(傍点筆者)

国園にすべき場所として、具体的に京都の東西両山間、奈良の附辺、須磨、厳島、橘立(橋立か)、三保、松島、鎌倉、八郎瀧などを掲げている。また、これら以外にも調査して、国園にするべき所があれば、漸次追加すればよいと。

さらに、国園を設けるについては、伐木、工場建築、地形の変更などについては制限あるいは禁止を行い、また、一般の住宅の場所や設計について監督し、大きな広告板や銃猟を禁止するということが必要であると述べている。続けて、これらの監督は地方庁と警察、あるいは国園事務所を設けるという。そこには今日の国立公園行政の大きな骨子はすでに含まれている。特に、姉崎は日本における建築条例の必要性を述べている。

彼は終り近くでこうまとめている。

国民は実利と共に、否それ以上に国土の美を敬せなければならぬ。工業の発達も、富の増殖も皆国民の幸福の爲めである。而して国民の幸福は上は祖先以来の文学や国土を尊重してその精神を呼吸すると共に、現在将来に亘って、国民としての優遊の余裕と、閑雅優美の品格とを養ふより出づる。この必要の爲め我輩は今日たりとも早く国園制度の確立を要求する者である。

姉崎のこの国粋主義的な論調は、明治33年3月から宗教学研究のため三年間欧州に留学したことにその因がある。彼はいわば学生時代からのドイツ文明への憧憬がつのり留学を志したが、実際、彼が見たものは資本主義による物質文明、帝国主義下にあるドイツであった。

精神主義者、嘲風にとってドイツは幻滅以外のなにものでもなかった。逆に彼の興味はヨーロッパ各地の自然あるいは芸術に向けられた。「われやいづこの記」のなかに、そのロマンチズムを読み取ることができる。

滞欧中に『太陽』に掲載された高山樗牛との往復書簡は有名であるが、そのなかにも、ドイツへの幻滅が吐露されている。

今幸にドイツ人不遜傲慢の中心たるベルリンを去り、南独の美術都会、イサルの河水に心腹を鮮にし、ボーデンの湖を渡り風光明媚の瑞西に來り、ツューリヒ湖畔に客となる事既に二旬…⁷⁾

また別のところでは

君よ余の精神は徹頭徹尾此文明と相容れず此人民と相和する能はざるなり、余は日本の文明扶殖家が多くドイツに模倣するを見ては寒心の思に堪へざるなり、況や其模倣も多くは外形の猿真似或は形式の教育智識器械の輸入に帰着するに於てをや……⁸⁾

この種の批判はその後の書簡である「再び樗牛に与ふる書」(『太陽』第8巻、第10号 M. 35. 8. 5) にも散見する。

姉崎は樗牛の唱導する「日本主義」とは一線を画していたが(この「日本主義」は当初「国粋主義」と区別されていたが後年その区別は曖昧となった)、滞欧中の体験により、彼の心に「日本主義」的なもの、あるいは、重昂の「国粋主義」的なものが芽生えたことは、この論評をみても容易に察することができる。

姉崎はこの「国園制度の制定を促す」を発表した後、アメリカの「国園」、ナショナル・パークを見聞することになる。彼はカーン氏の世界巡回資金を受けて、1年余りの世界周遊の旅(M. 40. 9~41. 10)に出発する⁹⁾。最初の目的地、アメリカへ向けて、明治40年9月4日、横浜を出港する。

この旅行記は彼のもうひとつの紀行文集である『停雲集』(M. 44. 7. 刊 博文館)のなかに収められている。「国園」にかかわる章は「ヨセミテの谷」と「文明の新緑」のところである¹⁰⁾。

終にヨセミテ(Yosemite)という谷に達する。右には二千尺の上から瀑布がかゝつて、まるで白紗の様に、左には直立三千尺(恰も比良山の高さ)の岩が、一つの太い柱の様に天に聳えてゐる。空は碧くすき通つて、海原の様な間に、三千尺の真白い岩山が浮いた如くに立つてをる。空と岩とは全く一つの様で、時々岩の後から白雲が出る。白雲の動くに従つて岩も浮き出し、動き始める様に見える。奇観に言葉も出ず、只空を仰ぐばかり。(「ヨセミテの谷」p. 163-164)

姉崎はその驚きを素直に書きとどめている。

姉崎は「文明の新緑」(西部アメリカの所見)の冒頭近くで、アメリカの印象について「始めて目に見た物質文明の活動は目眩するばかりの思ひもし、何処も何人も活動々々と躍つてをる様であるのを見聞しては、どこに文明の根があるかとも疑はれた」と批判的な見方をしてはいる。しかし、ヨセミテ溪谷に感嘆した如く、アメリカの大自然に対しては「西欧の大きな山岳の天然に

接して来て静坐沈思すると、稍何物かの印象を得たと纏まつた感を得る」とも述べている。

姉崎は、結びの段落で「終に西部アメリカの天然について一言したい」と付言し、アメリカのナショナル・パークについて述べている。

所謂 National Park 国園の制度の如きは、米国人の天然に対する畏敬心の發表で、この点はその人民に利一面でない或る偉大な精神の籠つてをる事を示す。自分は汽車の窓からシヤスタ山の荒れた高原、太古の森を眺め、又カリホルニアの広野を見た外に、ヨセミテの谷の国園に遊んだが、その雄大粗野、殆んど言葉に絶する。……米国人はこの山、この森を国園にして軍隊で護衛して、而してそこに天然のインスピレーションを得んとしてをる。此の如き天然のインスピレーションは必ず何物か偉大なものを生むに違いない。西部アメリカだけを見ても恐しい国と民がこゝにあると感ぜられる。(p. 186-187, 傍点筆者)

姉崎の最後の結びは、彼がかつて、国土の美、特に自然の美しさが、国民の愛国心、愛郷心を育むとして「国園制度の制定を促す」の筆を執ったことを考えると意味深いものである。

3. 坪谷水哉の「国立公園」観

姉崎の知己で彼と共に明治40年、ヨセミテを旅行した人物に坪谷善四郎がいる。彼はその印象を「ヨセミテ溪遊記」と題して『太陽』に書いている。(第14巻第11号 M. 41. 8. 1) これは、のちに博文館から出版される彼の旅行記『世界漫遊案内』(M. 42. 7) のなかに収録される。この「ヨセミテ溪遊記」には地図、写真が掲載され読者にとっては分り易い。

まず、「六十年前黄金の洪水地」と小題が付けられているところから引用してみたい。

余は大和殖民地を一覧して其夜、マセド町に宿つて、翌朝はヨセミテ溪の国立公園に遊ぶべく出懸けた。時は明治四十年九月二十八日、同行者は桑港の鷺津尺魔氏、別に姉崎嘲風、峯島活石の二氏は、一日遅れて桑港を發し、ヨセミテで邂逅する約束である。……(中略)……

マセド川の水源、ネバダ連山の奥深く、世界第一の奇勝ヨセミテ溪が、白人に発見せられたのは、金鉱発見後三年の千八百五十一年で、北米合衆国が、数十哩に亘る溪山全部を包括して、自然の儘なる絶景を国立の大公園と定めたのは、千八百六十四年¹¹⁾であつて、其の絶勝景まで、マセドからまだ大約百哩ある。ヨセミテ鉄道の八十三哩は、専ら其所へ行く為に出来て、此年五月開通した計りだ。(傍点筆者)

坪谷はナショナル・パークの訳語に「国立公園」をあてている。文中にあるようにヨセミテ溪はいわゆるゴールド・ラッシュによって発見されたものである。

開通してまだ五ヶ月ほどしかないヨセミテ鉄道に坪谷たちは乗り込む。ヨセミテ鉄道はマセド川沿いを走り、一日に二本の往復便がある。途中、金鉱精練所、水力発電所を見て「流石は米国だと先づ感心を禁じ得ぬ」と感想を述べている。('遊覧専門のヨセミテ鉄道')

このあと小題は「四頭立の乗合馬車」、「深山中の贅沢ホテル」、「雄渾秀麗の溪山」、「騎馬の絶壁登り」、「直立懸崖四千尺の絶景」、「馬を立つネバダの第一峯」、「輕快便利なる旅館」と坪谷のヨセミテ案内は続く。

坪谷は号を水哉という。東京専門学校政経科を明治21年、首席で卒業、翌年行政科も卒業するという秀才であった。明治21年、博文館に入社し、ただちに『太陽』の創刊から編輯に携わる。明治34年には東京市会議員となり、大正8年には日本書籍取締役となった人物である。『太陽』の経済時評にも多く執筆し、評論家としても著名であった。

坪谷のこの紀行文全体を通読すると、観光地としてのヨセミテ・ナショナル・パークが思い浮ぶ。そこには旅行者の目があり、ジャーナリストの目がある。

彼らの泊った「全溪唯一のセンチネルホテル」について、坪谷の観察をみてみたい。

時は既に秋の季で、此所のホテルもモ―週間で今年は閉店する相で、宿泊の客は甚だ少ないと云ふのだが、尚ほ食堂には三四十の貴女紳士が居た。流石は世界の富豪ばかり来て遊ぶ所として、何れも立派な服装で、食堂の給仕は皆な婦人だ。〔深山中の贅沢ホテル〕

このホテルの代表的な料理は山間で捕れる「マウンテン、トラウト」という魚のフライ、コーヒーはフランス風のもの、ブドウ酒は1860年頃のボルドー、室料は浴室付のツインで6ドル、晚餐は1人3ドルと筆まめに記している。

センチネルホテルは其溪間の中央に建てられ、溪流は軒端を繞つて流れ、画の様な橋は流れに横はり、橋下の深潭は、考樹に囲まれ、屋を圧する四方の絶壁は、仰いで辛ふじで青空を望む所より、万丈の白縮緬の様な飛泉が、半腹まで落ちて、下方は飛散して雲霧と為り、殆ど其の行衛を知らぬ。中にも最も美なるは、上層より一千六百尺落ちて、一たび山背に隠れ、再び近き懸崖の上から、更に五百尺落ち来り、二段と為て、懸るのが、ヨセミテ瀑な相だ。実にホテルの楼上より、廊下をグルリと一週すると、天地間に無類の大パノラマが眺められる。〔雄渾秀麗の溪山〕

とそのホテルの立地に驚いている。

この「雄渾秀麗の溪山」のところにわずかではあるが、彼の「国立公園」の解釈が述べられている。「此所は国立公園と云ふても、唯だ自然の風景を保護するのみで、道路を開いた外には、豪も人工を加へざるが最も嬉しい」と。ごく簡単なものであるが従来の公園とは異なり、自然の風景そのままを保護したのが国立公園であると述べている。

坪谷はこの「ヨセミテ溪遊記」の次号の『太陽』、第14巻第12号(M. 41. 9. 1)に興味ある論説を引き続いて執筆している。「名所旧蹟の保存」と題するもので、「大博覧会準備中の急務」と副題が付けられている。

この博覧会というのは明治45年に開催予定の日本大博覧会（一度明治50年に開催が延期されたが結局は中止となる）のことで、この開催を機会に名所旧蹟の保存をすべきであると論じたものである。

世界の各国に対し我が国が、最も誇るに足るものは何ぞ、と言はゞ、万世一系の皇統を上に乗置き、二千五百余年間、未だ曾て外敵の侵略を受けた事の無い目出たい歴史と、其の歴史に伴ふ建国以来の由緒ある名所古蹟と、山光水色の風景とであろう。

と冒頭のはじまる。続いて、外国人客の誘致問題に触れている。

外国人が我国へ来り遊び、真に感服して何人も喜び観るものと言へば、今日までの実験に徴するに、先づ山水自然の風景に勝るものは無い。近年来遊外国人の数は著しく殖えて、欧米人のみにて一ヶ年二万人近くに上つて居るが、彼等の足を留める原動力は何かと言はゞ、実に我が秀麗なる風景である。此の風景は、万国に卓絶して、各国の誇りとする美観を、盡とく我国に具備して居ると言ふも誣言で無い。（傍点筆者）

欧米各国と比べて、誇るに足るものは、自然の風景である。さらには、名所旧蹟も外国人客にとって興味を引くものであると。また、スイス、イタリアの国民収入の一大財源としているのは、来遊の外国人客であると続く。

坪谷はここでアメリカのナショナル・パークをその例として掲げる。前述のごとく坪谷の実際の見聞からの発言である。

北米合衆国は、建国日未だ浅く、古蹟の著名なるもの乏しく、僅に独立戦争と南北戦争との外には、歴史を飾るべき事変少なき上に、国民ももまた物質的文明に渴仰して、風景などは重きを置かぬかと思へば、大違いだ。カリホルニア州のヨセミテ溪を、シーラネバダの連山の奥に、国立公園として其所まで百

哩に近き遊覧鉄道を敷設し、またロッキー山間のグラスド河に沿ふ溪谷の奇勝を探らしめんが為に、故さらにデンバー及リオグランド鉄道を敷設し、コロラドスプリングスの浴場に近きパイクスピーク山頂の眺望を縦まゝにせしむるために、海拔一万四千尺の絶頂まで、九哩の登山鉄道を設け、また鮑くまでナイヤガラ瀑布の壮観を探らしめんが為に、川の兩岸を繞って、英米二国の版図に跨る圈帶線の電車鉄道を設け、或は大瀑布の直下まで、汽船を浮めるなど、探勝の設備が周到なると共に、其の景勝の保護に頗る注意して居る。(傍点筆者)

坪谷は経済評論家らしく、国立公園を含め景勝地の保護がいかに国家経済上有益かを具体的に示している。

終り近くでこう述べている。

来る四十五年の大博覧会には、世界各国の人を集めんとするといふ。其時に、外国人を喜ばせる様な見せ物は、我国には何があるであろうか。余輩の知る所では、自然の風景と古蹟に勝る物は無い。(傍点筆者)

坪谷にとって、アメリカのナショナル・パークは遊覧客誘致の施設と映っていたのである。

4. 三好学の「ナショナル・パーク」理解

前述の如く、ドイツの物質文明に幻滅を感じた姉崎が「国園制度の制定を促す」を著したのは逆に、ドイツの自然保護運動の旗手であるコンヴェンツに共感し、ドイツ流の天然記念物保存を唱導したのが三好学であった。概して、三好はナショナル・パークを天然記念物保存の手段であると一貫した見方をとっている。三好は1891年から3年間、ドイツに留学し、帰国後、東京帝国大学植物学教授となる。また、大正8年に成立する史蹟名勝天然記念物保存法に尽力した人物でもある。

三好は『東洋学芸雑誌』の第23巻、第301号(M. 39. 10. 25)に掲載された「名木ノ伐滅并ニ其保存ノ必要」¹²⁾のなかで、ナショナル・パークに言及している。

名木保存ノ方法ニ就テハ、コンヴェンツ氏ノ如キ種々ノ考察ヲ公ニシタルガ、是レ自ラ各国ノ状態ニヨリテ異同ナキニ非ザルベク、要スルニ其邦土ノ状態ニ最モ適當セル方法ニ基ヅキ、保存ノ途ヲ講ズルニ若クハナシ……(中略)……又多ク固有ノ樹木ヲ藏スル森林ニシテ、學術上研究ノ資料ニ必要ナルモノハ、之ヲ學術上ノ演習林(農科大学演習林ノ如ク)トシテ保存スベク、之ニ反シテ自然ノ風光ニ富メル樹林ノ如キハ、之ヲ風致林トナシテ保存スルモ可ナリ、或ハ又其附近ノ土地ヲ併セテ自然ノ公園トナシ、彼ノ米園ニ見ルガ如キ「ナショナル・パーク」トシテ保存スルモ宜シカルベク……

さらに、『太陽』第13巻の第1号(M. 40. 1. 1)及び第2号(M. 40. 2. 1)にわたって「天然記念物保存の必要性並に保存策に就て」を学芸欄に執筆している。そのなかの「(五)外国に於ける植物保存の計画並びに其实例」(第2号)では、コンヴェンツの言を援用しつつ、ドイツの各都市の保存状況を述べたあと、アメリカについてこう述べている。

北米合衆国では国内の五ヶ所の土地を特別法律に依て国有公園として存在することにして、彼のエーロー、ストーンパークの如きは即ち其の一である。又該法律に依て米国固有ノ動植物、即ち彼の「マンモス」樹并に獅牛(ビソン、アメリカヌス)を保護することができた。(傍点筆者)

五ヶ所とあるが、この時期、明治40年(1907年)までに、実際は Yellowstone (1872), Yosemite (1890), Sequoia (1890), Mount Rainer (1899), Crater Lake (1902), Wind Cave (1903), Mesa Verde (1906), Platt (1906), の8ヶ所がナショナル・パークになっている。(カッコ内は設定年)

三好は明治39年には訳語として「ナショナル、パーク」とカタカナを用いているが、ここでは「国有公園」¹³⁾をその訳語にあてている。

明治44年3月11日、貴族院に「史蹟及天然記念物保存ニ関スル建議案」が提出された。発議者、候爵徳川頼倫、伯爵徳川達孝、それに田中芳男、三宅秀の四名。賛成者117名にのぼる。もちろん三好もそのなかに含まれている。

その建議案の理由書にはナショナル・パークをこう引き合いに出している。

特ニ北米合衆国ノ如キハ有力ナル公共団体ニヨリテ同国内ノ史蹟名勝ノ保存ニ努メ諸所ニ[●]国設公園ヲ置定シ該区域内ニ在ル天然物ノ保護ヲ実行セリ（傍点筆者）

「国設公園」の訳語が使用されている。

三好はこの建議案が出された同じ年、『東洋学芸雑誌』（第28巻、第357号、M. 44. 6. 5）に「日本に於ける天然記念物保存思想の発達」を発表する。この論説には前に述べた「史蹟及天然記念物保存ニ関スル建議案」提出の経緯とその啓蒙的発言が含まれている。

三好は再びこう述べている。

彼の外国に於ける「ナショナル、パーク」の如きは即ち是れであって、米国には以前から出来て居るが、瑞西では昨年（M. 43—筆者注）一月一日より同国の名勝保存協会で始めて該国内に同様の計画を実行した。此「ナショナル、パーク」はアルプス山脈中のウンテルエンガデン地方のヴァル、クルオーツェに定めたので、其区域内にある高山、幽谷の天然の風景は勿論、大昔から伝はって来た動植物鉱物一切を挙げて、完全に保存し、人工を加へたり、又は採集を行ふことの出来ないやうにしたのである……

三好はその後天然記念物保存運動の啓蒙に努力する。『太陽』第18巻、第5号（M. 45. 4. 1）に「天然記念物保存事業の発達」を執筆する。ここでは、ナショナル・パークについて第二章「外国に於ける天然記念物の保存」のなかで、以前よりも詳しく述べている。

茲に最も著しいのは米国に於ける計画である、米国では夙にナショナル、パーク即ち[●]国設公園の制度を設けて、同国の最も固有なる天然の風景、並に其土地に棲息する動植物、及び地質鉱物を合せて保存する計画を起した、此ナショナル、パークは一つたび米国で始まってから近年になって他国でも之に倣ふて追々置くことになって来た、米国のナショナル、パークの初めは間歇性噴熱泉で有名なるエーローストーンで千八百七十二年に出来たので、其面積は甚だ大きい、即ち二百十四万二千七百二十エーカーの土地を総括して、ワイオミング、モンタナ、イダホの三州に跨って居る……（傍点筆者）

この後、ヨセミテをはじめ11のナショナル・パークの名が掲げられている¹⁴⁾。

三好はこれ以後も、各種の新聞雑誌、あるいは著書（『天然記念物』（T. 4. 4. 富山房）、『天然記念物解説』（T. 15. 5. 富山房）等）に、ナショナル・パークを天然記念物の保護手段の一例として紹介している。

三好の訳語は先述の如く、初期においては「ナショナル、パーク」あるいは「国有公園」を使用している。後「国設公園」も用いているが、彼もこの訳語には苦勞したらしく「ナショナル、パーク」をあてているのが多い。訳語に関して述べているところがあるので、最後に引用しておく。

斯様に米国には許多のナショナル、パークがある、茲に一寸述べて置きたいのは、此ナショナル、パークを字義からして『[●]国設公園』或は『国立公園』などゝ訳して居るが、併し此『公園』なる字の意味がいろいろに取られて、甚だ混雑を起すことになる、日本で公園と云へば日比谷公園とか、上野公園乃至浅草公園の如き、充分に人工を加へたもので、都人の遊覧に適するやうになって居るが、此米国式ナショナル、パークは斯る人工的、又小規模のものではない、天然の大山水を其儘利用して、出来得るだけ自然の風景を毀損しないやうにして、其土地の天然物を保存し、学術上の参考になり又美観上、歴史上からも、

特徴を保つやうにする主意である。(傍点筆者)

5. 木下淑夫の「国立公園」所見

もう一人、ナショナル・パークに「国立公園」¹⁵⁾の訳語を用いて紹介した人物、木下淑夫¹⁶⁾を忘れるわけにはいかない。

今まで述べてきた紹介者が新聞雑誌、あるいは著書のなかで取りあげ、論じてきたのとは趣を異にする。彼のナショナル・パークについての紹介は、帝国議会のしかも議案を検討する委員会での発言である。いわば、閉鎖的なところで行われたものである。しかし、彼のもたらした情報は、鉄道院技師の立場で鉄道経営という意識をもった観察であった点、注目に値する。

木下の発言は、第27回帝国議会衆議院に提出された「国設大公園設置ニ関スル建議案」(M. 44. 2. 18提出)についての委員会の第三日目、明治44年3月6日に参考人として招喚されて行われたものである。この議案は、富士山を中心として国が一大公園を設けるというものであったが、結局、議案自体は、尻すぼみになる¹⁷⁾。

さて、木下淑夫のナショナル・パークについての説明を委員会議録から追ってみたい。
まずカナダからはじまる。

加奈陀ニ御承知ノ「バンフ」ト云フ国立公園ガアリマス、是ハ丁度「バンクーバー」カラ加奈陀太平洋鉄道ニ依ッテ加奈陀ノ広原ヲ横切リマス丁度「ロッキー」ノ山中ニアル公園デゴザイマシテ、加奈陀ノ政府ガ経営シテ居リマスノデ、広サハ日本ノ平方里ダト九百平方里ホドアルデアリマス……¹⁸⁾

説明はこの後、ナショナル・パークの施設として歩道、自転車、馬車道をあげている。カナディアン・パシフィック鉄道が国立公園内にホテルを経営していることにも言及している。この鉄道は1886年に開通したものである。

続いて、アメリカのナショナル・パークについて、話に移る。

合衆国ニハ国立ノ公園モアリマスシ、又各州で州立ノ公園モ沢山アリマスガ、国立公園ハ目下十二バカリアリマス、ソレカラ準公園トモ云フベキ、向フデ「モニューメント」ト言ッテ居リマスガ、ソレガ二三バカリアリマス、国立公園ノ中デ最モ大ナルモノハ御承知ノ「イエローストン」ノ国立公園デアリマシテ、是ハ「ワイヨーミング」ト云フ州ニアリマス、尤モ他ノ州ニモ跨ッテ居リマス、ソレカラ次ニ大ナルモノハ「カリホルニア」州ニモ「ヨセミテ」ノ国立公園ト云フモノガゴザイマシテ、今ノ「イエローストン」ノ国立公園ト云フモノガ丁度千八百七十二年ノ合衆国ノ議会デ以テ国立公園ニサレタモノデ、是モ大サハナカナカ大キク、ザット日本ノ平方里デ五百平方里バカリアリマス¹⁹⁾

と続く。さらに、国立公園中、イエローストンとか、ヨセミなどは軍隊によって、その保護管理がされていることにも言及している。

斯ウ云フ大キナ公園ニナルト、軍隊ヲ其処ニ置テサウシテ之ヲ管理サセテ居リマシテ、各種ノ狩猟或ハ伐木等ヲ禁ジテ居ルノミナラズ、徒ラニイロイロ自然ノ風景ノ美ヲ壊ハスト云フヤウナ人間ヲ取締ルタメニ、軍隊ヲ用井テ居ルデアリマス²⁰⁾

概して、木下の視点は「遊覧地ニハ鉄道ノ営業ガ非常ニ関係」するというもので、「国立公園」もその例外ではなく、むしろ、「遊覧地」としてアメリカの「国立公園」は経営されているという見方である。

次に、木下は、アメリカでは「国立公園」の研究が、単に「風景専門ノ技師」あるいは「衛生当局者」だけでなく「鉄道ノ当局者」や「政治社会学会」という方面でも行われていることを述べている。

さらに、木下はアメリカにおける「国立公園」の設定規準というべきものに触れている。これは「[「ボストン」]ノ風景技師「ノーレン」氏」が掲げている条件である。

第一規模が非常ニ大キナモノデナケレバナラス、即チ多数ノ所謂何万人或ハ時ニ依ッテハ何十万ノ人ガ入ルコトガ出来ルヤウニナルノデナケレバナラスト云フコトガ、第一ノ条件デアル、第二ハ運輸機関ガ所謂其国立公園ノ附近マデ届イテ居ッテ、或ハ船デモ宣シ鉄道デモ宣シ、国ノ各方面カラ成ルベク容易ニ行クコトノ出来ルモノデナケレバナラス、第三ニハ無論其土地ガ健康地デナクテハナラス、第四ノ条件トシテハ又土地ガ或ハ国有ノ土地デアルカ、或ハ個人ガ持ッテ居ッテモ寄附スル望ノアル所トカ、或ハ買上ゲルニシテモ極ク安イ所トカ何分大キナ土地デゴザイマスカラ、土地ハ全部ヲ買ハヌニセヨ、容易ニ得ラレル場所デナケレバナラス、ソレカラ第五即チ最終ノ条件トシテハ無論景ガ佳クシテ独特ノ風景ヲ有ッテ居ル所デナケレバナラス、単ニ風景ノ佳イト云フノデハナイ、其処ニ行ケバ一種異ッタ感ヲ来スト云フヤウナ風景ノ土地デナケレバナラス¹⁸⁹

木下が引用した条件のうち、第4の条件は日本においては望むべくもない。日本の国立公園の地域制を考える端緒がここに見えている。

3. 結

今日、ナショナル・パークは「国立公園」と訳されている。特に異和感はないように思う。しかし、黎明期には、三好學が言うように、「公園」ということばが付いているため、人工的な印象を与え混乱を招いたことも事実である。これは見方を変えれば、「公園」という概念がある程度定着した証左でもあるが。

大正中期以降、帝国議会で再び国立公園問題が取り上げられ¹⁹⁰、それはまた、新聞雑誌を通じて世上に流される頃には、「国立公園」の訳語が使われるようになる。しかし、世間において「国立公園」というものが理解されていたわけではない。

上原敬二は『わたり鳥の記』(T. 11 刊)のなかでその状況をこう語っている。

国立公園と言う名称が世に紹介されたのはここ、二、三年以来のことであって、恐らくまだ本当にその意味は充分世人に分ってはおるまいと思う。分っていないどころではなく、非常な誤解をしているのが田舎に多い。日本アルプスのようなのが国立公園であると思ったり、日比谷公園や浅草公園が山奥にできると喜んだりしている。何となしに富士山と言うものが国立公園になるのだらうと、はかない観念のもとにその実体をつかもうとしているものもある²⁰⁰。

前章では、各々の紹介者が、それぞれの立場でナショナル・パークを捉え、それに「国園」「国有公園」「国設公園」「ナショナル、パーク」の訳語を与えたことを述べた。これは、一つの言葉の概念が形成され定着する過程でもある。

今少し、その事例を追ってみたい。

1915年、大正4年2月20日から12月4日まで、アメリカでサンフランシスコ・パナマ太平洋万国博覧会が開催された²¹¹。この万国博に訪れた二宮利作という人物は、会場の東端に作られたイエローストーン国立公園のミニチュアについて書き留めている。

『エロー・ストーン・パーク』是は米国政府所属の大公園、自然の溪谷其儘を国民公園にしたエローストーン・パークを擬ねた者で、宏大なる設計である。全面積は四英加、奇巖怪石、草でも木でも其通りにうつしたものである²²⁰。(傍点筆者)

彼はナショナル・パークに「国民公園」の訳を与えている。4 エーカーというのは約 1.6 ha である。宏大なミニチュアである。

また、この博覧会が開催された同じ年、大正4年の9月には、地質学の権威、横山又次郎の著になる『世界に於ける自然の奇観』が出版された。その第一番目が「黄石国有大公園の奇観」である。16頁にわたって説明されている。横山又次郎は「国有大公園」をその訳にあてている。

大正3年9月20日に創刊された史蹟名勝天然紀念物保存協会の機関誌『史蹟名勝天然紀念物』ではどうかだろうか。

白井光太郎は「国設公園」と「国立公園」を使用している²³⁾。上原敬二はナショナル・パークの訳に「国立公園」をあてているが、それには混乱があるとして、彼独自の解釈をしている。つまり、現在混同して用いられている「国立公園」というのは真の国立公園、彼によると、これが National Park で「貴重なる天然紀念物の保存を目的としたる区域にして、同時に雄大なる代表的風景地たることを要する」ものと、国民公園、こちらは Nations Park で、これは「既に破壊された風景又は原始の態を失った風景地であって、十二分に人工を加へてその維持開発改良を図るべきもの」という定義をしている²⁴⁾。

また、保存協会の会長である徳川頼倫は「国設公園と民衆公園」(第5巻、第10号T. 11. 10. 1)で「このごろ世上の興味を惹いている問題の一つとして、国設公園若しくは国立公園という名称で、天然の景物を保存利用する計画を、国費で実現しやふという論が流行してまゐりました。国設公園とか国立公園とかいふのは米国でいう国民公園、即ちナショナルパークのことであるとのことです。」(傍点筆者)と述べている。

時期が前後するが国の方ではどうか。

農商務省山林局でも、保安林制度の立場から天然紀念物保存について注目し、コンヴェンツが1907年(M. 40)、イギリスにおいて行った講演の翻訳を明治45年に『天然紀念物保存ニ関スル各国法制』²⁵⁾として刊行している。

アメリカのナショナル・パークについてもページをさいている。「千八百七十二年創設セルイエローストーン国設公園 (Yellowstone National Park) ハ最モ古ク且ツ最大ナルモノニシテ、主トシテゐおみんぐ (Wyoming) 州ニ位シ、面積三千三百四十八平方哩ヲ有ス」と。他にセコイヤ、ゼネラル・グラント、ヨセミテ、マウント・レニア、アリゾナの各名前を掲げている。ここでは「国設公園」の訳語が使われている。

大正9年11月、内務省で翻訳されたアーレンスの『合衆国の国立公園』はそのタイトルからも分かるように、ナショナル・パークは「国立公園」と訳されている。また同省が大正10年1月に翻訳したボックの『天然紀念物保存』でも、「国立公園」が用いられている。

先ほど述べたように、ナショナル・パークの訳語は「国立公園」に淘汰されてゆく。当初、誤解を招く訳語であったにせよ「国立公園」ということばとして定着する。また、それは同時に訳語から、日本における「国立公園」の概念の形成でもある。外来のナショナル・パークは咀嚼され消化されたわけである。昭和期に入り、実際に「国立公園」が指定され実体として現われることになる。

引用文献及び註

- 1) U. S. National Park Service: *Laws relating to the National Parks and Monuments*, Washington, 1933, p. 26.
- 2) 'Illustrated Guidebook for travellers round the world' という英文のタイトルも付されている。青木嵩

山堂はこの『万国名所図絵』の他に国内向けに『内国旅行日本名所図絵』も出版している。

- 3) 初版は M. 21. 7 で引用は M. 23. 6 の第三版。「米国博士ボスウェル氏原著、京都府士族山本憲一訳述」とある。
- 4) 国立公園, 361号, p. 18-19, 1972.
- 5) 同上, 383号, p. 24-26, 1981.
- 6) 『花つみ日記』, p. 439-494.
- 7) 姉崎正治: 高山樗牛に答ふの書, 太陽, 第8巻, 第2号, p. 22, 1902.
- 8) 同 : 同 , 同 第8巻, 第3号, p. 30, 1902.
- 9) 『花つみ日記』の序言に「氏 (M. Albert Kahn) が世界巡回資金 (la bourse pour la tour autour du monde) を諸国の大学に寄附し, 学者をして世界を巡つて諸国民の事情を研究せしむる様にせられた趣意は実に人道のため世界平和のためである。」とカーン資金について述べている。
- 10) 『停雲集』, p. 162-187. 尚, 針ヶ谷氏が5) のなかで詳しく紹介されているので詳細はそちらに譲りたい。
- 11) 正確には1865年に州立公園, 1890年に国立公園となる。この点は針ヶ谷氏によって5) のなかで指摘されている。
- 12) 三好自身の言によれば, この論説が, 天然記念物保存についての彼の最初のコメントである。(『東洋学芸雑誌』第28巻第357号, M. 44. 6. 5 「日本に於ける天然記念物保身思想の発達」)
- 13) 『東洋学芸雑誌』第27巻, 第347号 (M. 43. 8. 5) の雑報欄に「国有公園」が紹介されている。「国有公園
アメリカ合衆国にては我が日光とか松島とか云ふべき風景秀絶なる地を画して極めて広大なる地域に亘りて大規模の公園を作り国家自から保勝の任に当り称して之を国有公園と云へり其の最大なるものは有名なるイエローストーン, ナショナルパークにしてヨセミテ瀑布地方亦此種の公園に属す然るに近頃更に新公園の設立案を計画して本年の議會に提出せると云ふ其予定地はモンタナ州の西北部に於てカナダの國境に近き所にして其地域はさまで大ならざるも猶ほ南北六十哩に亘れり…」
- 14) 三好がここで「カサ, グランデ」の名を掲げているが, Casa Grande Ruins は National Monument である。
- 15) 俵氏により4) で指摘されている。
- 16) 『日本鉄道史』下篇には木下淑夫についてこう記されている。「高等ノ學術ヲ研究セシメンカ為職員ヲ海外ニ留学セシムルノ例ハ鉄道作業局ニ於テ既ニ之カ端緒ヲ開キタリ, 其最初ノ留学生ハ技師木下淑夫ニシテ明治三十七年七月以来休職ノママ私費留学中ナリシヲ三十八年五月復職セシメ直ニ通信省留学生規程ニ依リ満二年間英, 独, 米ノ諸国ニ於テ運輸營業ニ関シ研究ノ為留学セシメタリ」木下はこの帝國議會では鉄道院營業課長という職にある。
- 17) 丸山宏: 国立公園設置運動に於ける社会・経済史的背景, 京大演報, 第55号, p. 272-274, 1983
- 18) 第27回帝國議會衆議院委員會議録, 国設大公園設置ニ関スル建議案委員會議録
- 19) 17)に同じ. p. 278-279.
- 20) 『談話室の造園学』(1979年刊技報堂) 所収. p. 100.
- 21) この万国博の開催は, 翌年1916年8月25日に設立されることになる国立公園局 (National Park Service) にとって絶好の機会を与えたものであった。すでに後発のカナダでは国立公園局 (National Park Bureau) が設けられ, アメリカは先を越されたかたちになっていた。「イエロー・ストーン・パーク」のミニチュアは内外に対するいわば国立公園局設置のデモンストレーションであった。
青木芳雄は『アメリカの国立公園』(昭和5年刊) のなかでこう指摘している。「一九一五年の博覧会は勿論国立公園系統化運動の直接原因ではなかったが, これにこの上もない機会と刺激を与へたことは争はれない。夙に識者が熱烈に叫んで専ら与論の喚起につとめて來たのであるが, その運動は, 遅々として容易に進まなかった。しかし, 一度春回り來て満山の雪自ら融けるやうに, 博覧会開催の機運と共に, それは一瀉千里の勢で, 国を挙げての総動員大運動にまで発展し, 遂に成功を収め得たのである。即ちその理由は博覧会見物のため來訪する外国人に, アメリカの山岳美風景の妙趣を観せたいという希望と動機が十分そこにあったからである。のみならず一般に国立公園の事情が国民並びに議會の完全な諒解をうるに至ったので, そこで国立公園局の設置の議が期せずして朝野の要望となり, アメリカ公民協會の後援に頗る熱烈を極めた。」
- 22) 二宮利作: 大博と桑港及其付近, p. 151, 1915.
- 23) 「植物美より見たる国設公園」(第5巻第3号T. 11. 3. 15) では「国設公園」を使用している。「国設公園と植物」(第5巻, 第6号T. 11. 6. 5) ではタイトルには「国設公園」となっているが, 本文は「国立公園」を用いている。
- 24) 上原敬二: 国立公園の真意義 (上) 史蹟名勝天然記念物, 第5巻, 第8号, p. 90, 1922.
- 25) 小寺駿吉によればこの原本は, Conwentz, H., *The care of natural monuments with special reference to Great Britain and Germany*, 1909 である。(小寺駿吉: 日本に於ける自然保護運動, 国立公園, 第61号, 1954)

Summary

Yellowstone National Park was born in 1872 as a first national park in America. Informations of national parks were introduced to Japan early in the 20th century, in the end of the 30th in Meiji era. At that time the people's consciousness for the nation was rising in Japan.

Introducers translated national parks differently into Japanese and understood them from their own points of view. Their national park ideas were naturally different and biased personally.

The Nippon-jin, an ultranationalistic journal which Seikyô-sha published, commented on national parks in 1905. The word used for the translation was "Koku-en". Its comment was quoted in the Syûkan Heimin Shimbun, a weekly paper, and re-recorded in the Chûô-kôron, a general magazine.

Masaharu Anezaki, a scholar of religion, commented on the national park idea in the Taiyô, a general magazine. His Japanese equivalent was also "Koku-en". His idea was near ultranationalism or Japanese nationalism which was advocated by Chogyû Takayama.

Zenshirô Tsuboya, a journalist, visited Yosemite National Park with Anezaki in 1907. He wrote his impressions on Yosemite and adopted "Kokuritsu-kôen", grasping national parks as one of sightseeing resources.

Manabu Miyoshi, a botanist, was influenced by H. Conwentz and grasped national parks as a means for preservation of national monuments. He used "Kokuyû-kôen" or "Kokusetsu-kôen", but mainly national park in Japanese syllables.

Yoshio Kinoshita, who belonged to the Railway Bureau, spoke in the Imperial Diet about national parks in Canada and America with a view to management of the Railway. He used "Kokuritsu-kôen" for national parks.

Thus there appeared several Japanese translations of national park in its dawning period. Sometimes national park was confounded with a mere public park. But "Kokuritsu-kôen" was finally selected as the legitimate translation in 1920s. The process of this selection is considered to have been the process of forming Japanese idea of national parks.